

高島藩主諏訪家墓所

—上原頼岳寺高島藩初代藩主廟所—

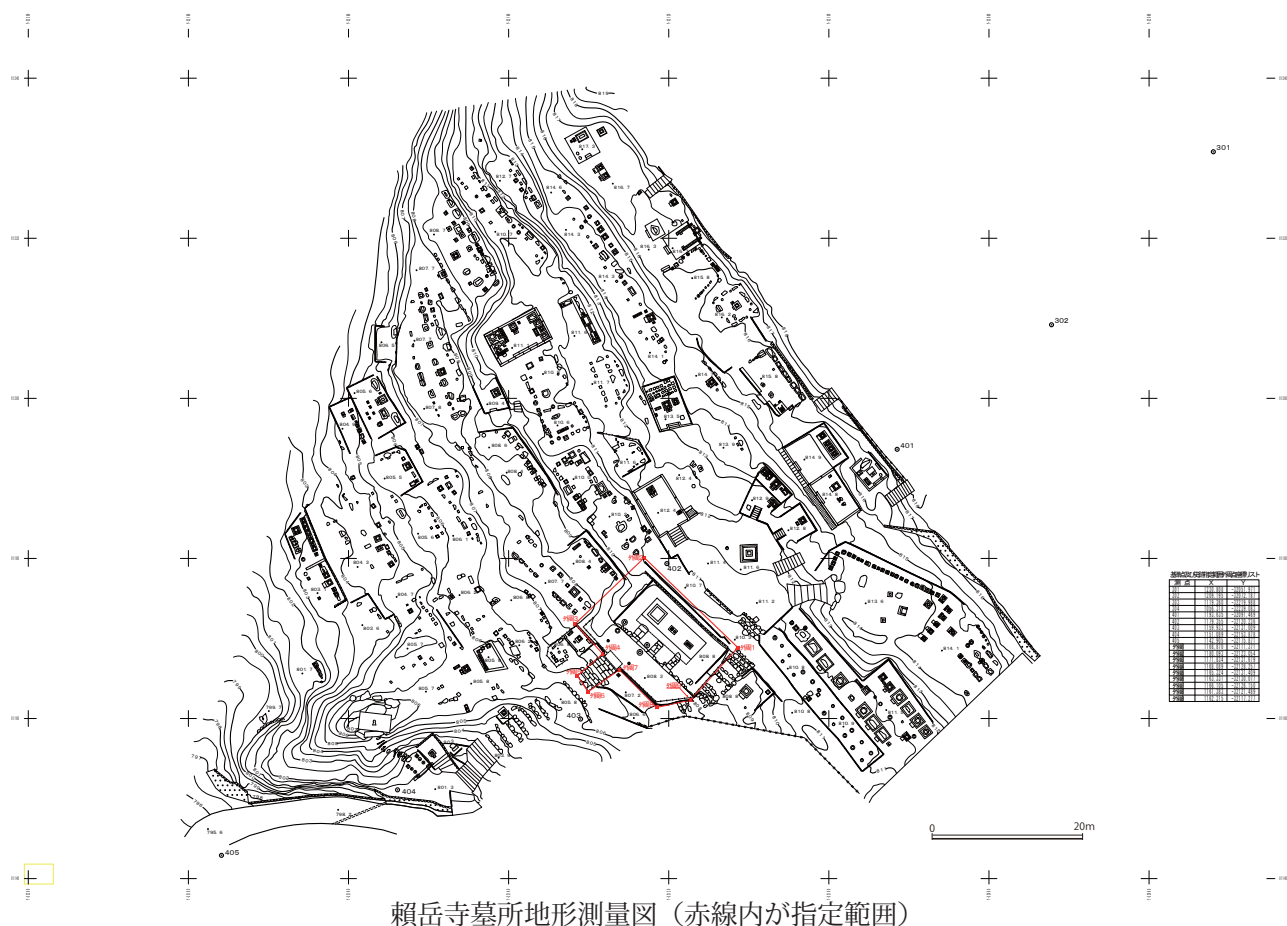
国の文化審議会（会長 馬淵明子）は平成 28 年 11 月 18 日、文化審議会文化財分科会の審議・議決を経て、茅野市史跡「諏訪氏頼岳寺廟所^{びょうしよ}」を史跡とするよう文部科学大臣に答申しました。史跡は諏訪市上諏訪の温泉寺にある藩主の墓地と一括での指定で、名称は「高島藩主諏訪家墓所^{たかしまはんしゆすわけぼしよ}」となります。

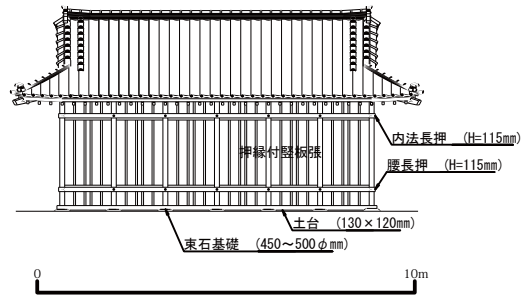
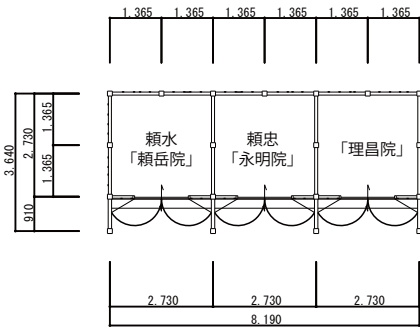
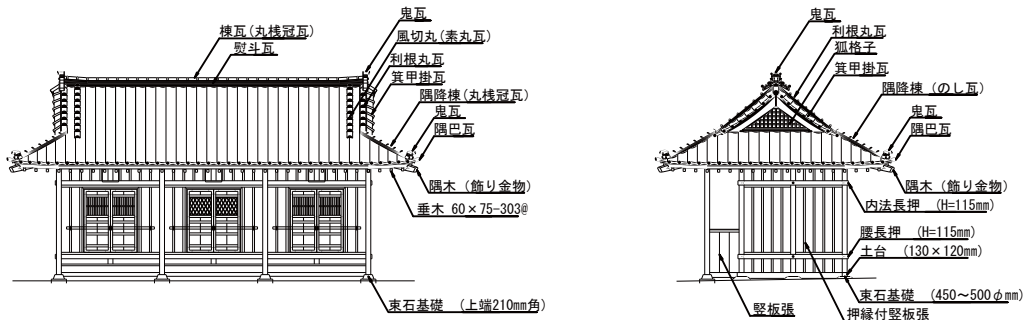
高島藩主の墓は、初代頼水^{よりみず}とその両親である頼忠^{よりただ}・理昌院^{りしょういん}の墓所が上原頼岳寺にあり、2代藩主忠恒^{ただつね}以降8代忠恕^{ただみち}の墓が上諏訪温泉寺にあります。中世以来、諏訪氏が戦国時代末期まで茅野市上原を拠点としていたことは、この地が東西、南北の交通の要衝として重要な場所であったことを示しています。

茅野市の史跡としては、特別史跡「尖石石器時代遺跡」、史跡「上之段石器時代遺跡」、史跡「駒形遺跡」に次いで 4 件目となります。

これまで茅野市は、八ヶ岳山ろくを中心とした縄文時代の遺跡に注目が集まっていますが、諏訪大社上社前宮などとともに、古代や中世においても諏訪地方の中心地であったことが理解されます。

今回の指定は、諏訪家廟所^{みやうじよ}のみの指定ですが、周辺には諏訪家を支えた家臣団の墓地も多く残されていて、江戸時代初期の藩主と家臣団の墓所の関係を示す資料としても、貴重なものです。



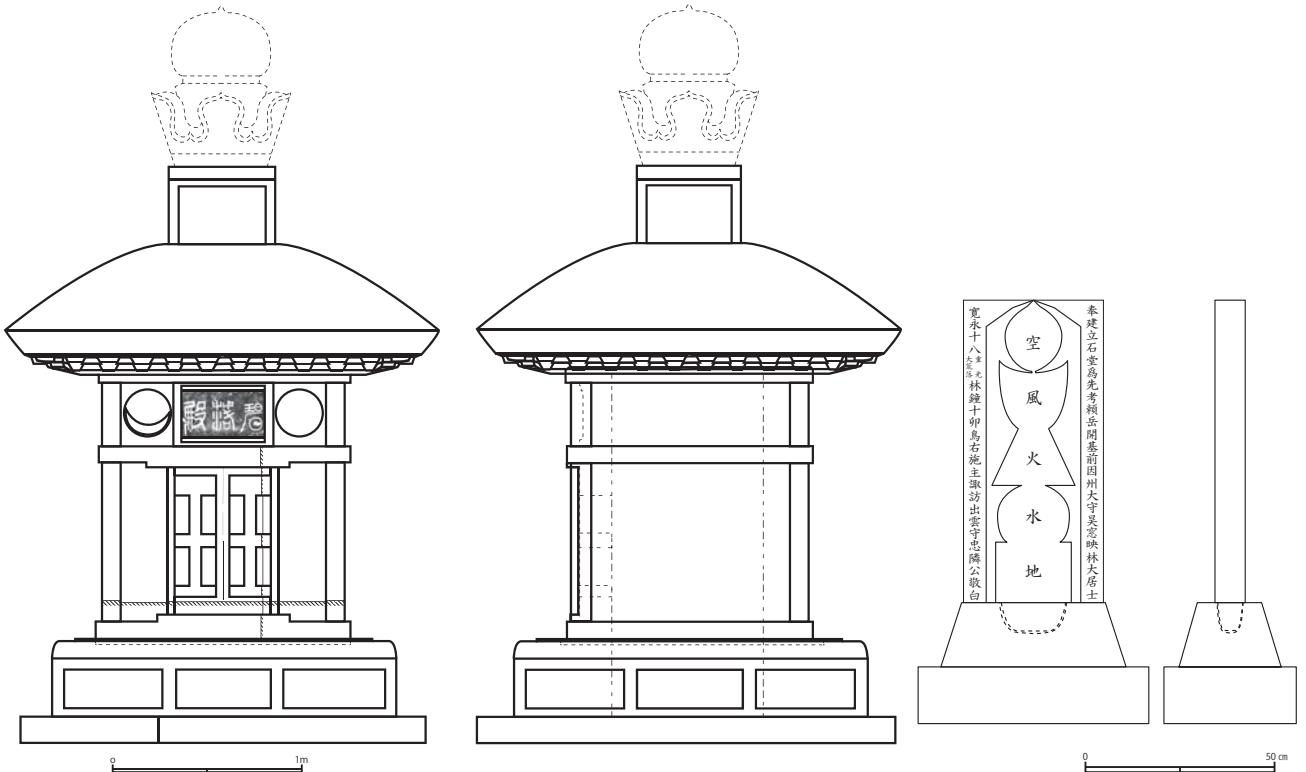


御霊屋実測図

頼岳寺は、初代藩主頼水によって、寛永8（1631）年に開基されました。

御霊屋及び家臣団の墓所は頼岳寺本堂の左手の石段を上ったところにあります。御霊屋は石段を上った正面にあり、3室に分かれ、左側が頼水（頼岳院）、中央が父頼忠（永明院）、右側が母理昌院が祀られています。

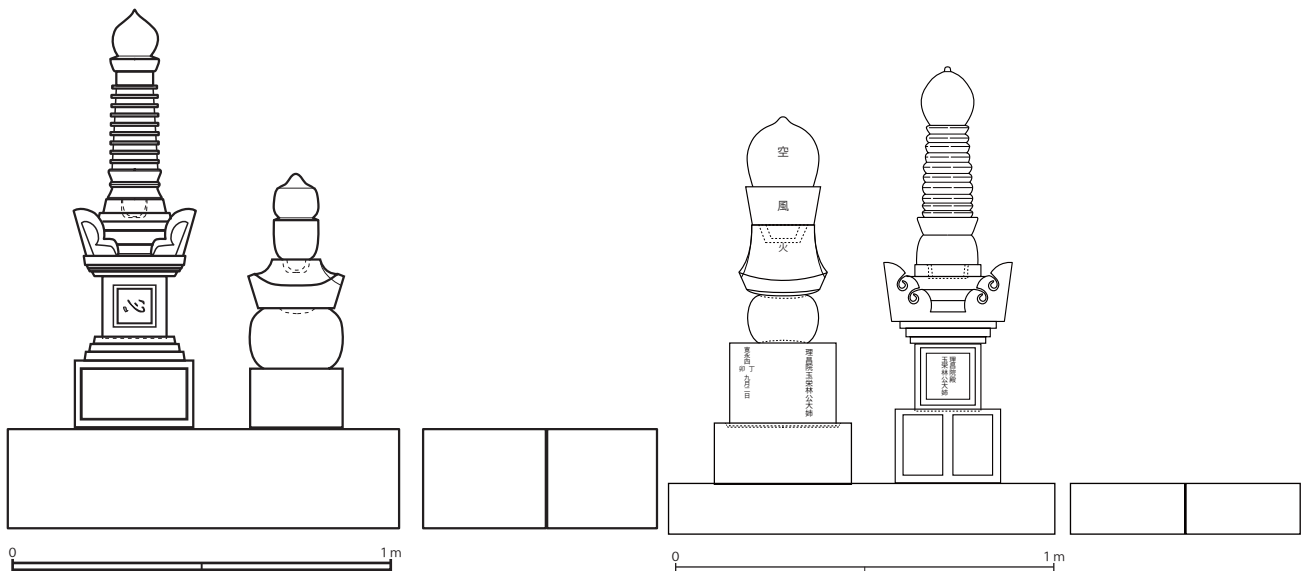
御霊屋は、頼岳寺の記録から、安政6（1859）年に再建されたものと考えられます。



頼水石廟と石廟廟内石碑

頼水廟は、安山岩製で、基礎の上に築かれ、下から基壇、柱と壁・扉を構成する建物本体、宝形造りの屋根、露盤と宝珠から構成され、内部に石碑が安置される。最上部の露盤と宝珠は御霊屋の天井の上であり、観察することができないため、同形式の石廟である妻貞松院ていしょういんの石廟を参考に復元実測をしました。

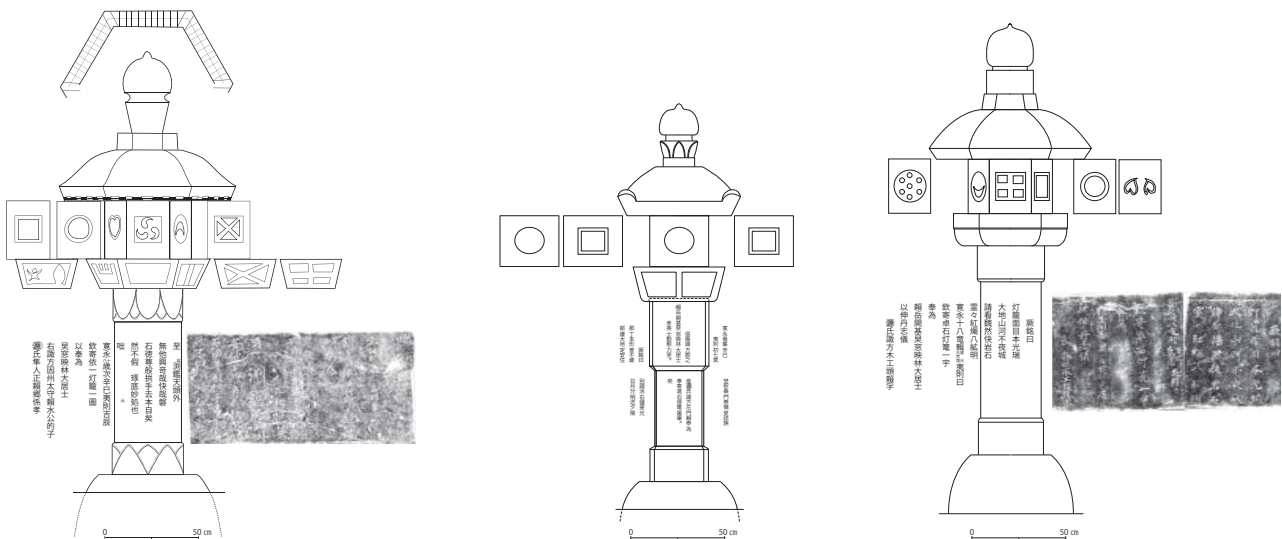
内部の石碑は、五輪塔が描かれ、右に頼水の法名、左に石廟を建立した忠恒の名が刻まれています。



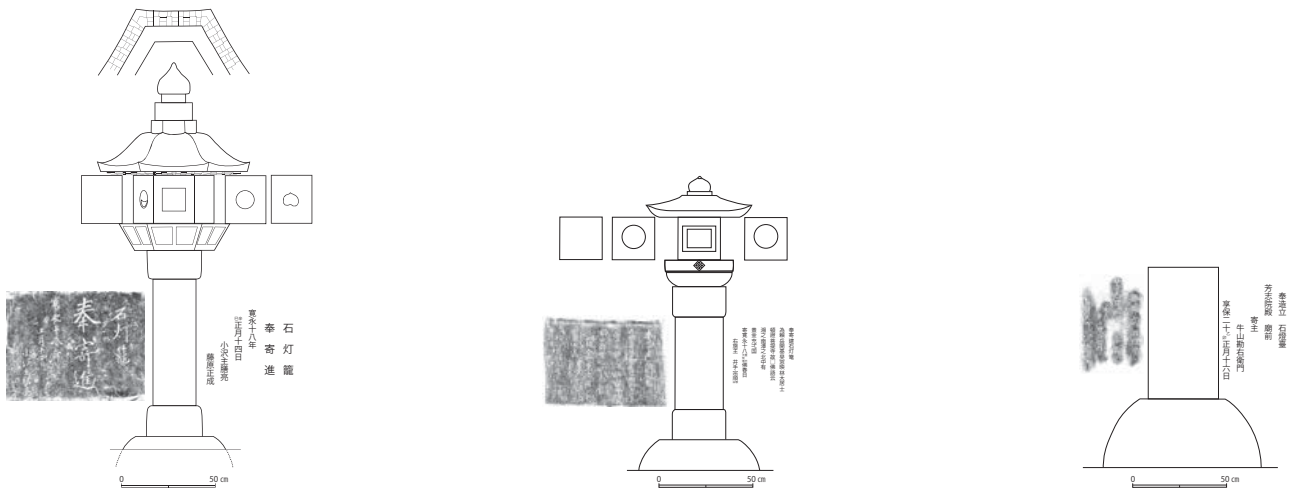
父頼忠（永明院）（左）と母理昌院の墓

父頼忠の墓室内には基壇の上左側に宝篋印塔、右側に五輪塔が建てられています。また、母理昌院の墓室には基壇の上左側に五輪塔、右側に宝篋印塔が建てられています。どちらも宝篋印塔と五輪塔が対をなしていますが、位置は左右反対となっています。

頼忠は永明寺に葬られたましたが、破却された後に頼岳寺に改葬されました。また理昌院の墓は上原城下の理昌院平にあったものを頼岳寺に改葬したとされていますが、頼水の御霊屋を作った際に移したものと考えられます。



御霊屋前奉献石灯籠 諏訪頼郷（左） 諏訪頼泰（頼長）（中） 諏訪頼孚（右）



御霊屋前奉獻石灯籠 小沢主膳（左） 井手宗順（中） 牛山勘右衛門（右）

御霊屋の頼水廟の前には、6基の石灯籠が奉獻されています。上の3基は頼水の子が奉獻したものです。頼郷よりさとと頼泰よりやす（頼長よりなが）は、早くから松平忠長ただなが（徳川家光の弟）に仕え、その後旗本となっています。頼孚よりふは頼水の家督を継いで2代藩主となった忠恒ただつねの家臣として諏訪家に残ります。廟所内にある墓石は、この頼孚のものと考えられます。

この御霊屋前には、2代藩主忠恒の奉獻石灯籠が見られません。これは、頼水の石廟を建立したのが忠恒であるため、石灯籠の奉獻は行わなかったものと考えられます。なお、石廟内の石碑には、諏訪出雲守忠隣とあり忠恒ではないが、諏訪藩主で出雲守の官位をもつものは忠恒だけであるので、忠恒の別名でしょう。

小沢主膳おざわしゅぜんは頼水の家臣で、頼水の娘（養女ともいう）を妻としています。井手宗順いでそうじゅんは藩医として頼水に仕え、高島藩に配流となった松平忠輝（家康の6男）の世話もしています。井手家はその後、明治を迎えるまで藩医を務めます。なお、井手家の墓は諏訪市貞松院にあります。共に諏訪家と重臣として石灯籠を奉獻したものでしょう。

牛山勘右衛門の奉獻石灯籠は、銘文に芳志院ほうしゆいんでん殿とあることから、別の場所から移されたものでしょう。灯籠に記された年号も享保とおよそ100年ほど後のものです。

御霊屋の右わきに、花こう岩の自然石を用いた高さ1mほどの墓石があります。墓石の上半分は風化が激しく読み取れませんが、郷土史家の矢島数由かずよし氏が昭和9年に調査したところによれば、風化が激しいながらも何とか文字を読み取っています。それによると、法名と没年月日から頼水の子である諏訪頼孚かづよしのものと推察されます。頼孚は兄である諏訪忠恒の家臣として諏訪にいたことから、ここに葬られたのでしょう。

